

アブー・シャイフ著『威厳の書』序論分析

加藤 瑞絵*

I. はじめに

クルアーンには、天地の創造、太陽、月、星、風雨、動植物、農作物など、自然界の様々な事物や現象を語る章句が多い。これらは神の力を示す徴(āyah)として、そしてまた神から人間への恩寵として、クルアーンの主要なテーマの1つである。本稿で採り上げるアブー・シャイフ Abū al-Shaykh ‘Abd Allāh ibn Muḥammad ibn Ja‘far ibn Ḥayyān (369/979年没)の『威厳の書 *Kitāb al-‘Aẓamah*』¹⁾は、そのような神の徴に関する多くの伝承²⁾を集めた著作である。アブー・シャイフという名で知られる著者は、イスファハーンの歴史家、伝承家であり、後世の伝記では、優れた学者で非常に敬虔な人物であったと伝えられている³⁾。校訂者のひとり、ムバーラクフーリーは、『威厳の書』の重要性として、後代の著述家に多く引用されたことを挙げている⁴⁾。IIIにて後述するように、イスラーム思想史上最大の思想家の1人と評されるガザーリー Abū Ḥāmid al-Ghazālī (505/1111年没)も、同書の記述を利用した可能性が指摘されている。中世イスラーム世界では広く読まれていたものと推測されるが、同書はこれまで研究者の間であまり注目されず、先行研究はわずかである。しかも、長く写本のままで留まっていたこともあり、テキストを詳細に検討した研究は皆無といつてよい。本稿では、まず先行研究を参照しながら同書を紹介し、関連著作にも言及しながら、先行研究の問題点や課題を確認する。その上で、先行研究が注目し、ガザーリーとの類似性も指摘される同書の導入部分の記述を分析する。これにより、先行研究の問題点を解決するとともに、新たな課題を確認することを目指す。

II. 『威厳の書』について

1. アブー・シャイフの『威厳の書』について

『威厳の書』は全51章、1,303の伝承から成り、構成は以下の通りである。まず第1～3章では、神の様々な創造物(khalq)について考えること、それに対して与えられる恩寵に関する伝承が挙

* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

1) 同書には3種の刊本があるが、うち1冊(Abū Shaykh, *Kitāb al-‘Aẓamah*, ed. by Muṣṭafā ‘Āshūr, Cairo: Maktabat al-Qur‘ān lil-Ṭab‘ wa-al-Nashr, [1991])は未見である。使用テキストは以下の2冊。Abū Shaykh, *Kitāb al-‘Aẓamah*, ed. by Muḥammad Fāris, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah, 1994; id., *Kitāb al-‘Aẓamah*, ed. by Riḍā‘ Allāh ibn Muḥammad Idrīs al-Mubārakfurī, 5 vols., Cairo: Dār al-‘Āsimah, 1998 (以下‘*Aẓamah*と略記し、巻数と頁数を示す)。後者の方がより多くの写本を参照し、バリエーションを含め詳細な注記もある。そのため本稿では後者のテキストを主として用いた。

2) 同書には、預言者の言行を伝えるいわゆる「ハディース」の他に、預言者以外の人物の言行を伝えるものも多く、且つそれらが預言者のハディースと同列に並べられている。そのため本稿では基本的には「伝承」という言葉を用い、「預言者は～と言った」「預言者は～した」とあり、明らかに預言者の言行であると分かる場合のみ「ハディース」と呼ぶ。教友自身の言葉であるのか、それが預言者の言葉を伝えるものであるのか、判断としない場合には教友の言葉とし、ハディースとはしない。

3) Abū ‘Abd Allāh Muḥammad al-Dhahabī, *Kitāb Tadhkirat al-Ḥuffāz*, 4 vols., Hyderabad: Majlis Dā‘irat al-Ma‘ārif al-‘Uthmāniyah, 1968–1970, Vol. 3, 946–947; Abū Nu‘aym, *Aḥbār Iṣbahān*, ed. by S. Dederling, 2 vols., Leiden: Brill, 1934, Vol. 2, 90–91.

4) 具体的には、アブー・シャイフの弟子であるアブー・ヌアイム Abū Nu‘aym (430/1038年没)の他、イブン・カイム Ibn Qayyim al-Jawziyah (751/1350年没)、スヌーティーヤ Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī (911/1505年没)(後述)らの名前を挙げている。‘*Aẓamah*, Vol. 1, 128, 158–168.

げられている。続く第4～9章は神に関する事柄（神の唯一性、力、命令や、神の玉座と足台について）、第10～20章は諸天使、諸天と樂園、第21章以下は太陽や月などの天体、風雨、大地、海、動植物や過去の人物（例えばアダム、ムーサー、ダーウードら。こうした歴史上の人物や、彼らにまつわる歴史的な出来事も、神の力を示す徴として理解される）に関する伝承が続く。例えば太陽と月に関する章には、太陽と月、星々は神の玉座の光から創られたという伝承⁵⁾が、雷と稲妻に関する章には、雷は雲を任された天使で、稲妻は天使が持つ火からできた棒、雷鳴は天使が雲を追い立てる声であるという伝承⁶⁾が挙げられている。また、預言者や教友らによるクルアーン解釈を伝える伝承も多い。校訂者のムバーラクフリーーは同書について、伝承学や歴史学、クルアーン注釈学的手法を用いて神の威厳を説明する内容であると述べている⁷⁾。

このような内容の同書を、9世紀に本格化するギリシア語文献の翻訳活動を経て発展した科学とは異なる、最初期のムスリムたちの「科学」を伝える貴重な情報源であると評価し、イスラーム科学史の中に位置づけたのがハイネン A. M. Heinen である⁸⁾。同書で扱われる自然現象は、例えば、ほぼ同時代のマクディスイー Muṭahhar ibn Tāhir al-Maqdisī (391/1000年頃没)の『創造と歴史 *al-Bad' wa-al-Ta'rīkh*』(以下、『創造』と略記)、マスウーディー Abū al-Ḥasan 'Alī ibn al-Ḥusayn al-Mas'ūdī (345/956年頃没)の『黄金の牧場と宝石の鉱山 *Murūj al-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar*』などでも扱われており、その点で新しさはない。『威厳の書』の独自性は、ギリシアの哲学者や科学者の言説を1つも採り上げることなく、専ら初期ムスリムによる自然現象の説明を収集した点にある⁹⁾。スヌーティー Jalāl al-Dīn al-Suyūṭī (911/1505年没)の『スナナの天文学に関する高貴な天文学 *al-Hay'ah al-Sanīyah fī al-Hay'ah al-Sunniyah*』は、アブー・シャイフが伝えた伝統的科学及び伝承形式をよく継承したものといえる¹⁰⁾。

ラトケ B. Radtke は、アブー・シャイフの『威厳の書』が、博物学の代表的著作であるカズウィーニー Zakariyā' ibn Muḥammad al-Qazwīnī (682/1283年没)の『被造物の驚異と存在物の不思議 *'Ajā'ib al-Makhlūqāt wa-Gharā'ib al-Mawjūdāt*』(以下、『被造物の驚異』と略記)へ間接的影響を与えた可能性を示唆している。カズウィーニーより約1世紀前に、同名著作をトゥースィー Muḥammad ibn Maḥmūd ibn Aḥmad Tūsī (没年不詳)が著しており、両者の作品の間には、天上界の記述から始まり、地上へと降下し、人間とその国家の記述で終わるという構造において明らかな類似がある。ラトケはこのようにトゥースィーとカズウィーニーとの影響関係を指摘し、さらにトゥースィーの著作の情報源を探り、その原型の1つと考えられるものが、アブー・シャイフの『威厳の書』なのである¹¹⁾。トゥースィーの作品には、様々な地域から伝わる逸話や預言者のハディース

5) 'Aẓamah, Vol. 4, 1140.

6) 'Aẓamah, Vol. 4, 1279.

7) 'Aẓamah, Vol. 1, 121.

8) Heinen, "Tafakkur and Muslim Science," *Journal of Turkish Studies* 18 (1994), 108. (以下 "Tafakkur" と略記)

9) Heinen, *Islamic Cosmology: A Study of as-Suyūṭī's al-Hay'ah al-Sanīyah fī al-Hay'ah al-Sunniyah, with Critical Edition, Translation, and Commentary*, Beirut: Orient-Institut der deutschen morgenländischen Gesellschaft, 1982, 43. (以下 *Cosmology* と略記)

10) 同書は『威厳の書』とほぼ同様の章立てであり、かつ収録された伝承の約7割で、その典拠としてアブー・シャイフの名が挙げられている。本文中で先に紹介した太陽と月、星の伝承と雷の伝承も収録されている。Heinen, *Cosmology*, 15, 30.

11) Radtke, "Die älteste islamische Kosmographie Muḥammad-i Tūsīs 'Agā'ib al-makhlūqāt," *Der Islam* 64 (1987), 279–281. 『威厳の書』と共に『被造物の驚異』の原型と考えられているものは、プルタルコスに帰せられる『哲学者たちの自然学説誌 *Placita philosophorum*』(以下『自然学説誌』と略記)のアラビア語訳である。同アラビア語訳、その影響を受けた著作については、次の研究を参照。Daiber, *Aetius Arabus: die Vorsokratiker in arabischer Überlieferung*, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1980. ラトケはまた、前述のマクディスイー『創造』の概要を紹介する中で、その記述内容と、『自然学説誌』やアブー・シャイフの『威厳の書』など関連著作の記述内容との対応を詳細に記している(第2章第1節第7項)。Radtke, *Weltgeschichte und Weltbeschreibung im mittelalterlichen Islam*, Stuttgart: In

も引用される。しかしながら、例えば雷という自然現象を雲と空気の落下から説明する¹²⁾ように、『威厳の書』とは異なる説明原理に基づいている。またラトケは、タバリーの al-Tabarī (310/923年没) の『諸使徒と諸王の歴史 *Ta'rikh al-Rusul wa-al-Mulūk*』など、ハディースを用いながら、世界の創造から語り始める世界歴史記述との関連において『威厳の書』に言及している(その内容については III にて後述)。

以上のように、多様な要素から成る同書を理解するために、異なる視点からのアプローチが試みられてきた。伝承を列挙するのみで、著者による序文や解説がないことも、同書の理解を困難にしている要因であろう。

2. 同名著作群について

『威厳の書』に関しては、さらに同名著作群の存在を述べておかねばならない。アブー・シャイフ以外にも、9～16世紀にかけて複数の人物が『威厳の書』というタイトルの著作を著している¹³⁾。これを1つの確立したジャンルとして捉えてよいか、それはどのようなジャンルであるといえるか、この点についても評価は定まっていない。しかしこれら同名著作が、神の威厳の顕現としての世界観を共有することは確かである。ここでは、アブー・シャイフ以前の著作で主要なものを紹介しよう。最初期の『威厳の書』には、イブン・アビー・ドゥンヤー Ibn Abī al-Dunyā (281/894年没) のものがある¹⁴⁾。その冒頭では、『威厳の書』の由来が次のように述べられている。アダムは神から教えられた知識を書きとめ、死の前にそれを洞窟に隠した。その洞窟は年に一度、アーシューラーの日にだけ入り口が開く。ユダヤの預言者ダニエルがその噂を聞き、洞窟へと赴き、アダムが隠した書を書き写す。このダニエルの書は、神の計らいによって人々に広められた。これが『威厳の書』である。イブン・アビー・ドゥンヤーの『威厳の書』は、ダニエルの『威厳の書』を入手したユダヤ教からの初期改宗者、アブドゥッラー・イブン・サラーム ‘Abd Allāh ibn Salām (43/663 or 664年没) が、第3代正統カリフのウスマーン ‘Uthmān ibn ‘Affān (35/656年没) にそれを読み聞かせるというかたちで進行する。但しこの『威厳の書』は、アブー・シャイフの『威厳の書』や、イブン・アビー・ドゥンヤーが残したその他多くの著作のような伝承集の形式をとっていない¹⁵⁾。イブン・アビー・ドゥンヤー以外にも、同様の書物の由来と場面設定による『威厳の書』が散見される¹⁶⁾。それらはみな、天と地の諸層に関する内容であるが、それら諸層の位置関係は曖昧で、明瞭な世界構造は捉え難い。その中で、地獄の罰に関する記述が多く、詳細である。同書の記述には、学者たちが著したクルアーン注釈書の中には見出されないような民衆的なクルアーン解釈が散りばめられており、「非公式な (unofficial) イスラーム」を知るために有益だと指摘もある¹⁷⁾。

Kommission bei F. Steiner, 1992, 68 ff. (以下 *Weltgeschichte* と略記)

12) Tūsi, *‘Ajā’ib al-Makhlūqāt*, ed. by Manūchihr Sūtūdāh, Tehran: Sharikat-i Intishārāt-i ‘Ilmī va Farhangī, 78–79.

13) Heinen, “Tafakkur,” 106–107. 本稿では紹介しない『威厳の書』の著者については、同論文及び拙稿「『威厳の書』と呼ばれる著作群について」『オリエンツ』49/2 (2006), 246–247 参照。

14) MS. Carullah 400, Süleymaniye Kütüphanesi, Istanbul; MS. Garret Collection 764, Princeton University.

15) そのため、『威厳の書』はイブン・アビー・ドゥンヤーが独自に著した作品ではなく、彼以前の著述家が遺した作品を、その通りに写したものであろうと推測される。Heinen, “Tafakkur,” 106.

16) Raven, “A Kitāb al-‘Azama: on Cosmology, Hell and Paradise,” in F. De Jong (ed.), *Miscellanea Arabica et Islamica: Dissertationes in Academia Ultrajectina Prolatae anno MCMXC*, Leuven: Peeters, 1993, 135–142. レイヴンが扱った写本の1つは、東京大学東洋文化研究所アラビア語写本ダイバーコレクションに収録されている (Vol. II, Ms. 143, 2391)。また、『威厳の書』関連の研究としては最新のものであるカマルが扱った『威厳の書』は、著者不明であるが、内容はイブン・アビー・ドゥンヤーの作品と類似している。Kamal, *al-Adab al-‘Ajā’ibī wa-al-‘Ālam al-Gharā’ibī fī Kitāb al-‘Azamah wa-Fann al-Sard al-‘Arabī*, Beirut: Dār al-Sāqī, 2007.

17) Raven, 141–142.

アブー・シャイフ以前の『威厳の書』には、ムハースィビー al-Hārith ibn Asad al-Muḥāsibī (243/857年没)によるものもある¹⁸⁾。同書は散逸し、一部しか現存しない。現存する部分には、伝承集の形式はみられず、アードムに遡りダニエルが書写したという由来も語られない。ファン・エスが詳しく紹介しているように、世界に現われた神の経綸 (tadbīr) を通して、神の唯一性を示すという内容である。例えば、神が山々を杭とし、大地を揺るぎないものとしたことや、神が植物に水を与えること、神が天空に大気と風を置くこと、男女を結び付けることなどが、神の経綸として語られる¹⁹⁾。ハイネンは同書の現存する議論内容から、これが神学的な作品であり、アブー・シャイフの『威厳の書』とは別系統に属すと判断している²⁰⁾。

アブー・シャイフの『威厳の書』にも、ダニエルの書という由来は語られない。先に構成を簡単に紹介したが、楽園や地獄だけでなく自然界の事象まで広く扱いながら、主題ごとにまとめられた諸章が整然と並ぶ。現在知られている限りでは、アブー・シャイフの『威厳の書』が最も包括的な内容であり、ハディース学の規則に従い、イスナードをすべての伝承に付している点が独特である。ハイネンは伝承集という形式について、信頼できる初期ムスリム伝承者たちによって証明された知識だけを提示しようとした著者の意図であると推測している²¹⁾。さらに、ユダヤ教やシア派の要素を含むイブン・アビー・ドゥンヤーの作品に対し、『威厳の書』を「正統的な」イスラームの伝統の中に位置づける試みであっただろうと評価している²²⁾。

アブー・シャイフの著した『威厳の書』と共に、これら同名著作群に関する研究も、依然その途上にある段階である。

III. 『威厳の書』とタファククル

アブー・シャイフの『威厳の書』第1～3章は、先に示した通り、神の創造物について考えることと、それに対して与えられる恩寵に関する内容であり、世界に現われた神の徴を扱う同書の導入部である。これらの章で、世界を観察し、神の徴を知ることの意義が示されるならば、それは同書全体を方向付けることになり、同書を理解する上でも重要な部分だといえる。ここでいう「世界」とは、自然界だけでなく、不可視界も含めた世界という意味である。これら3つの章では、「タファククル」(考えること)という語が多用される。『威厳の書』導入部を理解するためには、同語の分析が鍵となるだろう。クルアーンの中では、「かれこそは大地を広げ、その上に山々や河川を配置された方である。またかれはそこで、全ての果実を2つ(雌雄)の対になされた。また夜でもって昼を覆われる。本当にこの中には、考える(yatafakkarūna)人々への徴がある」(13:3)²³⁾のように、自然界の事物や現象に思いを致すという意味で度々用いられている。

『威厳の書』のタファククルについて、ハイネンとラトケが共に注目し、それぞれ以下のように

18) MS. Carullah 1101, Süleymaniye Kütüphanesi, Istanbul. 全148葉のうち、4葉(25b-28b)にわたって威厳の書からの1節が収められている。

19) J. van Ess, *Die Gedankenwelt des Hārith al-Muḥāsibī: Anhand von Übersetzungen aus seinen Schriften dargestellt und erläutert*, Bonn: Selbstverlag des Orientalischen Seminars der Universität Bonn, 1961, 163-167.

20) Heinen, *Cosmology*, 50; id., "Tafakkur," 106.

21) Heinen, *Cosmology*, 38-39.

22) Heinen, *Cosmology*, 39; id., "Tafakkur," 107.

23) 本稿のクルアーン訳は、主として『日亜対訳注解型クルアーン』(日本ムスリム協会、1996年改訂版)に拠った。他の邦訳を参照しつつ適宜訳語や表記を変更し、本文中(13:3)では yatafakkarūna の訳を「反省する人々」から「考える人々」に変更している。

述べている。まずハイネンは、創造主たる神の存在及びその創造行為を前提に、神への称賛行為として様々な自然現象についての知識を得る精神的実践として説明する²⁴⁾。そして、神の創造への終わりなき探求は、イスラーム世界における科学の発展に寄与するものであったとして重要視している²⁵⁾。次にラトケは、ハディースや伝承の中に見出される精神の働きとしてタファックルを説明している。タファックルは、感覚で認識される太陽や月、様々な自然現象、感覚では認識できない神の玉座、大地を支える魚など、これら宇宙論の知覚対象を1つの有意味な総体に秩序づける働きであり、可視のものによって不可視のものを類推する (*qiyās al-ghā'ib bi-al-shāhid*) という様式を用いる。それは「空想的な合理主義 (*fantastische Rationalismus*)」もしくは「空想的な原因論 (*fantastische Ätiologie*)」によって世界を把握する推論的思考であるという²⁶⁾。以上のハイネンとラトケの見解は、それぞれ自然科学、ハディース学という観点から示されたものといえる。だが、それは多様な要素から成る『威厳の書』の、ある特定の要素のみを扱うことであり、それ以外の要素に関わる特徴を捉えられていない可能性がある。そこで本稿では、同書の第1～3章の中でタファックルという語がどのように用いられているか、網羅的に調べる。それらを分析することにより、ある特定の観点から捉えたのではない同語の理解が可能となるだろう。そしてこの分析を通して、同書において世界を観察することがどのように語られ、どのように意味づけられるかを明らかにできるだろう。

さて、タファックルという語は、神秘主義 (タサウウフ) の文脈では一種の瞑想法を意味する。ラトケによれば、タファックルがタサウウフへ導入されたのは9世紀頃であり、宇宙の諸存在や諸関係について瞑想することを指していたようである²⁷⁾。ガザーリーがスーフイーの修行法として確立して以降、特にタサウウフの用語として知られるようになる。彼はその著『宗教諸学の再興 *Ihyā' 'Ulūm al-Dīn*』 (以下『再興』と略記) 第4部第9書「瞑想の書 *Kitāb al-Tafakkur*」²⁸⁾において、タファックルについて詳述しているが、同書の記述にはアブー・シャイフの『威厳の書』との類似性が見られ、両者の影響関係が指摘されている²⁹⁾。

スーフイーの修行法としてのタファックル (あるいはフィクル (*fikr*))。ガザーリーはこれら2つの語を同義に用いる) は、しばしばズィクル (*dhikr*) (あるいはタザックル (*tadhakkur*))。神の名を唱えたり、神に思念を集中させる修行) と対比されるが、後者を重視する立場が多数派である。ガザーリー以前のスーフイー思想家、例えばクシャイリー *Abū al-Qāsim al-Qushayrī* (465/1072年没) やフジュウィーリー *Abū al-Ḥasan al-Hujwīrī* (465/1072 or 469/1076年没) の著作には、タファックルに関するまとまった記述はない。しばしば『再興』への影響が取りざたされるマッキー *Abū Ṭālib al-Makkī* (386/996年没) の『心の糧 *Qūt al-qulūb*』にも、「瞑想の書」に相当する章はない。そのような中で、ガザーリーはタファックルをズィクルよりも優れた修行法として位置づけ、1章を割いて詳細に解説する。タファックルがズィクルよりも優れている理由は、後者が想起により同

24) Heinen, *Cosmology*, 44; id., “Tafakkur,” 107–108. なおハイネンによれば、神の存在を前提とすることから、同書においてタファックルが神の存在を証明するために用いられることはないという。

25) Heinen, *Cosmology*, 47; id., “Tafakkur,” 109.

26) Radtke, *Weltgeschichte*, 161–162. 例として、潮の満ち干の説明を紹介している。液体の入った容器に物を入れると水位が上がることから類推し、天使が世界の海に足を入れることにより、海の水位が上がるとする。『威厳の書』の海と魚に関する章には、ここで紹介した通りに潮の干満を説明する伝承がある。但し、その中でタファックルという語が用いられる訳ではない。『Azamah, Vol. 4, 1406–1407.』

27) Radtke, *Weltgeschichte*, 161, n. 146. タサウウフへの導入期の思想家としては、ハキーム・ティルミズイーや、『威厳の書』の著者でもあるムハースィビーが挙げられる。

28) 同書の内容については、拙稿「ガザーリーの思想におけるタファックルの意味——『宗教諸学の再興』第4部第9書の場合」『オリエント』49/1 (2006), 150–164 参照 (以下、「タファックルの意味」と略記)。

29) Heinen, “Tafakkur,” 107.

じ事柄を繰り返すだけであるのに対し、前者が新しい知識を獲得させることにある³⁰⁾。知識を増大させるという特質は、ハイネンが指摘した『威厳の書』におけるタファックルの特質と一致していよう。ガザーリーのタファックル論は大きく2つに区分される。第1の区分は、人間に関わるタファックルで、神からみて好ましいものと嫌悪されるものとを区別し、自己の行為や性質を改善するための反省である。これについては、『心の糧』に類似した表現がある³¹⁾。第2の区分は、神に関わるタファックルで、神の創造について知ることを通して神の偉大さを知るための観察や省察である。ここでは、人間の身体構造や自然界の事物、現象に関する詳細な記述が特徴的である。この第2の区分の記述は、『威厳の書』の特に第2章の記述と類似している。

ここでもう1つ問題を提起しておきたい。ガザーリーがマッキーを継承したと思われるタファックルの第1区分は、自分自身を思考の対象とする。このような自己へと向かう内向性は、先行研究が指摘した『威厳の書』のタファックルの特質には見出されない。ラトケとハイネンの見解は一見異なるようだが、タファックルが外界を対象とする点において一致しているからである。特にハイネンの見解では、神の創造物に関する「終わりなき探求」として、外界へと向かう方向性が強調される。『威厳の書』には、ガザーリーが述べた内向性は示されていないのであろうか。さらにまた、先に紹介したラトケの見解によれば、スーフイーによるタファックルの用法も、元来は外界を思念の対象とするものである。ガザーリーに見出せるタファックルの内向性は、いつ頃から語られるようになったのか。『威厳の書』におけるタファックルの用例を検討することで、この問題を考察するための手がかりが得られるかもしれない。但し、本稿では伝承者の検討や他の著作との比較までは行わないため、この問題を十分に扱うことはできない。

IV. 分析

1. 方法について

第1章から順に、「タファックル」という語に着目し、何を思考の対象としているか、どのように思考が進められるかという観点から分析を行なう。第1章及び第3章での諸伝承の配列について、規則性があるか否か、現時点では判然としない。内容の類似する伝承ごとにまとめられているわけでも、伝承者ごとにまとめられているわけでもないようだ。但し第1、3章ともに、章の冒頭から幾つかは内容の類似した伝承が続けて挙げられていることが分かる。このような伝承は、数としても各章内に占める割合が高く、重要であると思われる。そのため、各章冒頭から続く幾つかの類似した伝承から検討を始めた。

2. 第1章「力強く荘厳な神の徴、彼の力、支配、統治、威厳、唯一性について考えることの命令」

第1章は41の伝承から成る。そのうち、預言者のハディースは7つ、教友の言行は7つ、その他は後継世代とそれ以降の人物の言行である。本章は預言者のハディース「神の恩寵 (*ālā' Allāh*)

30) 但し、ガザーリーの議論では、未知の事柄に関する知識を初めて獲得するというのではなく、曖昧な認識を、三段論法の形式に則った推論を通して確実な知識へと変化させることも想定されているようである。拙稿「タファックルの意味」参照。

31) マッキーは、朝の礼拝後に行なうべきこととして、タファックルに言及する。その中に次のような記述がある。「1時間のタファックルは1年間の儀礼行為よりもよい、という伝承の注釈として、幾人かの学者が次のように述べている。それは、忌避されるものから好まれるものへ、欲求と欲望から満足と禁欲へと運ぶタファックルである。」ガザーリーが述べるタファックルの第1区分は、この記述を発展させたものとして捉えられるだろう。Makki, *Qūt al-Qulūb fī Mu'āmalat al-Mahbūb wa-Wasf Ṭarīq al-Murīd ilā Maqām al-Tawhīd*, 2 vols. in 1, Cairo: Maktabat al-Mutanabbī, Vol. 1, 14.

について考えなさい。神について考えてはならない³²⁾で始まり、類似したハディース及び伝承が続けて4つ挙げられている。章の後半にも再び繰り返され、このタイプは計9つある。預言者のハディース7つのうち、5つがこのタイプに含まれる。また、神について考えてはならないという同様の主旨を、クルアーン注釈として語る伝承も2つある³³⁾。

冒頭のハディースを除き、2番目以下に挙げられたものは、神について考えてはならないという命令が、ある場面の中で語られたり、考えてはならない理由が付されたりする。理由には、幾つか異なるものが挙げられている。教友イブン・アッバース Ibn al-'Abbās (68/687 or 688年没) が伝えたハディースには、次のようにある。

預言者が神について考えている人々の許を通り過ぎた。彼は言った。「創造物について考えなさい。創造者について考えてはならない。なぜなら、あなたがたはかのお方の定めについて、押し量ることはできないのだから。」³⁴⁾

この他には、もし神について考えたならば身を滅ぼすであろうという伝承³⁵⁾や、神が地上から遙か遠くにいるからだとする伝承³⁶⁾がある。これらの伝承からは、そもそも人間には超越者である神について考える能力がないために、神について考えてはならないのだと分かる。

続いて、人々が考えるべきとされる対象を確認したい。神について考えてはならないという命令を述べた9つのうち、「創造物」と「あらゆるもの」が3つずつ、「神が創造したものの驚異³⁷⁾」が2つ、「神の恩寵」は冒頭の1つのみである。「神の恩寵」が具体的に何を指すか、この伝承からだけでは分からない。同書の文脈においては、例えば農作物やそれらを育む陽光、雨などの自然界の恵みを含め、神が人間に与える様々な恩寵と理解できるかもしれない。

神について考えてはならないという命令を伝える伝承以外で、人々が考えるべき対象を明示している伝承は8つ、「想起」など「考える」の類義語を用いたものや、間接的に示していると理解できるものを含めると計13ある。その中には、先と同様に「神の創造物」を考える対象とする伝承や、「神の恩寵」と類似した「神が恵んだもの (mā an'ama Allāh)」を対象とする伝承がある。後者の伝承は次の通りである。ウマル 'Umar ibn al-Khaṭṭāb (23/644年没) がアブー・ムーサー Abū Mūsā al-Ash'arī (42/662年頃没) に書簡をしたためた。それは「あなたがあなたの行為を低めたいと思うならば、神があなたにお恵みになったものについて考えなさい」で始まり、神の定め、罪の裁き³⁸⁾、天の楽園について考えるよう伝える。ここでの神の恵みとは、神の定め、裁き、天の楽園

32) 'Azamah, Vol. 1, 210.

33) 「本当にあなたの主にこそ、帰着所はある」(53:42) に対するスフヤーン・サウリー (161/778年没) の注釈。同章句について、「力強く荘厳な主について考えることはない」と述べる。神ではなく、何について考えるべきであるかということに言及はない。

34) 'Azamah, Vol. 1, 216. 同様の伝承が「瞑想の書」にも引かれているが、そこでは「創造者について」ではなく「神について」となっている。テキストの脚注には、アブー・シャイフの弟子であるアブー・ヌアイムが典拠として指摘されている。Ghazālī, *Ihyā' 'Ulūm al-Dīn*, 4 vols., [Cairo: 'Isā al-Bābī al-Ḥalabī], Vol. 4, 410 (以下、'Ihyā' と略記し、巻数と頁数を示す)。

35) 'Azamah, Vol. 1, 215. 教友アブー・ザッル Abū Dharr (31/652年没) の言葉。

36) 'Azamah, Vol. 1, 212, 237-238, 240-241. 例えばイブン・アッバースの言葉に、「第7天から彼の足台まで、光で7000年の隔たりがあり、そしてさらにその上に、いと高く讃えられてあるお方がおられるのだから」とある。

37) 'Azamah, Vol. 1, 236, 255. 2つとも預言者と教友たちとの対話。預言者が何を想起しているのかと問いかけると、教友たちが神について考えていると答える。それに対し、預言者が「神について考えてはならない。神が創造したものの驚異について考えなさい」と注意したという内容。ここでは「想起 (dhikr)」と「考えること」が同義で用いられていると分かる。

38) 具体的には、禁じられた果実を食べたアダムが神に許されたこと (20:121-122)、跪拝することを拒んだイブ

を意味すると理解できる。そして「これら全てについて考えるとき、あなたはあなた自身を知り、あなたの行為を低め、神がその慈悲と赦しによってあなたを守って下さらない限り、あなたの行為は少しもあなたの助けにならないことを知るだろう」と結ばれる³⁹⁾。ここには、恵みを与え、人間に様々な力を及ぼす神の偉大さを知るならば、その者は神の行為と比べて自身の行為が取るに足りないものだと知り、おのれの無力さを知り、謙虚になるという過程が示されている。これは、神の創造物について考えることがもたらす効果の1つであろう。そしてここには、神の創造物という外的なものに向けられた思考が、それらの認識を経て間接的に自分自身へと向かう内向性が存在する。

その他には、「天や地、山、川、人間、動物などの創造物」⁴⁰⁾、「天と地の創造、昼夜の交替」⁴¹⁾など具体的な自然界の事物や現象や、神の徴、命令、威厳、地獄、来世などが考える対象とされる。これらは第4章以下各章の主題となるものであり、同書の導入に挙げられるに相応しく思われる。但し、これが著者の意図した工夫であるのか、そもそも「考える」(タファックル)という語がこれらの事柄と結び付いていただけであるのか、いずれの理由によるかはここからだけでは分からない。

また、第4章以下に現れてこない「聖典 (muṣḥaf)」について考えるべきだと伝える預言者のハディースが1つ挙げられている⁴²⁾。このハディースは、「考える」という言葉が用いられているという理由だけで本章に収められたとみるのが妥当かもしれない。しかしながら、本書の文脈に即した理解も可能であろう。クルアーンでは、神が創造した世界へ目を向けるべきだと繰り返し述べられている。クルアーンを熟読し、考え、そこに述べられた命令を理解することが求められていると解釈できよう。また、「考える」という言葉自体、クルアーンに由来する。第1章及び第3章には、クルアーン注釈、クルアーン朗誦に言及するなど、クルアーンに関連した伝承も多い。なお、同伝承はガザーリーの「瞑想の書」にも引用されている⁴³⁾。ガザーリーのタファックル論(第1区分)では、神からみて好ましいものと忌避されるものとを区別する判断基準として、クルアーンが重要な位置を占めている。

第1章中の残り17のハディースや伝承は、考えるべき対象を示していない。それらのうち、考えることを通して謙虚 (tawāḍu‘) や禁欲 (zuhd)、敬虔 (birr) といった善良な性質を身に付けることを述べる伝承が8つと多い。次はワフブ・イブン・ムナツビフ Wahb ibn Munabbih (112/730年頃没)の言葉である。

信仰者は考える者、想起する者、躊躇する者である。平安な態度で考える。すると沈黙し、謙虚になり、満足する。欲求を排除することにはや注意しない。自由になり、妬みを捨て

ースが神に呪われたこと (7:11-13、15:28-35)、安息日の禁を破り漁労をしていた人々が、猿や豚に変えられたこと (7:163-166) が挙げられている。

39) *Azamah*, Vol. 1, 247.

40) *Azamah*, Vol. 1, 245. 「しかし現世でこれを見られなかった者は……」(17:72)への注釈。現世で天地をはじめとする神の創造物を見ない者は、来世では「ますます道から迷い去る」(同)と述べる。

41) *Azamah*, Vol. 1, 253. 神の唯一性を疑う多神教徒たちが、その証拠を示すよう求めると、「本当に天と地の創造、昼夜の交替……の中に、理解ある者 (qawm ya‘qilūna) への徴がある」(2:164)という啓示が下ったという。ここでは「考える」(タファックル)に代えて「理解する」という語を用い、天地、昼夜の交替など自然界に現れた神の徴に思いを致すよう促していると考えられる。

42) 人々が自らに課すべき儀礼行為は、「聖典を見ること、それについて考えること、その驚異について理解すること」であるという。*Azamah*, Vol. 1, 226.

43) *Ihyā’*, Vol. 4., 411.

る。すると彼の許には愛が訪れる。はかないものを禁欲する。すると理性が完成する。……彼の喜びは、[人々が]目を閉じて眠るとき、[彼は起きて]いと高き神の書を朗誦し、心にそれを繰り返すことだ。時に彼の心は恐れ、時に目は涙で溢れ、朗誦して夜を過ごし、彼の罪について考えたり、彼の行為を取るに足りないものとみなしたりしながら、独居して昼を過ごす。——ワフブは言った。復活の日、かの大いなる召集において、被造物の長たちにこう呼び掛けられる。「立て、高貴なる者よ。そして楽園へ入れ。」⁴⁴⁾

考えることを通して謙虚になるという伝承(ウマルの書簡)を先に紹介したが、このワフブの伝承では、謙虚さを身に付けた後に愛を獲得し、さらに理性が完成するという過程が示されている。神への愛に言及する別の伝承にも、類似の過程が読み取れる⁴⁵⁾。また、同伝承の最後には「楽園へ入れ」という言葉がある。楽園を考える対象とする場合とは、異なる言及の仕方であろう。考え、善良な諸性質を得た結果として、楽園に入ると述べているからだ。本章中で楽園への到達を述べた伝承は、この1つだけである。その他、考える対象を明示しない伝承には、「考えることは、あなたにあなたの善行と罪を見せる鏡である」⁴⁶⁾というハサン・バスリー Hasan ibn Yasār al-Baṣrī (110/728年没)の言葉や、徹夜の勤行中に考えることについて述べたものがある⁴⁷⁾。これらの伝承は、「考えること」が有徳な行為であり、善良な性質を獲得し、自己を改善する手段となることを示すものであろう。

3. 第2章「神の威厳、唯一性、規則、経綸、統治について考えることの一形式」

本章は、同書の中で唯一伝承形式を外れ、著者自身の言葉で書かれている。クルアーンの章句「[徴は]また、あなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとしないのか」(51:21)についての注釈が述べられる。まず、人間が自分自身に注意を向け、その身体が巧みに整えられている様を知るにより、創造主である神の存在を知るに至ると指摘する。これはちょうど、建物を建て、その建築者の存在を知ることと同様であるという⁴⁸⁾。この後に、身体の構造、諸器官に関して詳細な記述が続く。先には引用しなかったが、第1章にも同章句への注釈があり、「自分自身について考える者は、儀礼行為のためだけに彼の関節が柔らかくされたのだと知る」⁴⁹⁾とある。これと同様の注釈は、例えばタバリーのクルアーン注釈にも見られる⁵⁰⁾。同章句を人間の身体及びその機能から説明する方法は、アブー・シャイフ以前からのものといえるが、医学的な知識を取り入れ、その説明を詳細にしている点がユニークであろう。本章は、同書の中で、アブー・シャイフがギリシア科学を継承した科学の成果をも取り入れた唯一の箇所である。ハイネンはこれについて、

44) 'Aḏamah, Vol. 1, 248-249.

45) ハムザ・ニーサーブリー Hamzah al-Nīsābūrī (伝記情報不明)の言葉にも、平安な態度で考えることから謙遜、満足などの徳を獲得し、さらに愛が生じ、理性が完成するとある。'Aḏamah, Vol. 1, 220-221. ハサン・バスリーの言葉には、考え、そこから神への愛に至ることは「理性ある者に対して生じる」とある。ここでは、理性が一定の完成をみた後に、神への愛に至るとしているようだ。'Aḏamah, Vol. 1, 259-261.

46) 'Aḏamah, Vol. 1, 227-228. 同書のイスナードにはフダイル・イブン・イヤード Fuḏayl ibn 'Iyād (187/803年没)が伝えたところがあるが、「瞑想の書」では、フダイルの言葉として引用されている。Iḥyā', Vol. 4, 411.

47) 'Aḏamah, Vol. 1, 241-243. ウトバ・グラーム 'Uṭbah al-Ghulām と呼ばれたバスラの禁欲家の言行を伝える。ウトバの正確な生没年は不明。後継世代の次世代、第3世代にあたる。Ibn Hibbān al-Bustī, Kitāb al-Mashāhīr 'Ulamā' al-Amṣār, Cairo: Maṭba'at Lajnat al-Ta'līf wa-al-Tarjamah wa-al-Nashr, 1959, 152.

48) 'Aḏamah, Vol. 1, 271.

49) 'Aḏamah, Vol. 1, 234.

50) Ṭabarī, Tafṣīr al-Ṭabarī: al-Musammā Jāmi' al-Bayān fī Ta'wīl al-Qur'ān, 13 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyah, 1999, Vol. 11, 460.

初期ムスリムから伝わる宇宙論的知識を収集するという著者の本来の意図からは外れるとして、積極的な評価をしていない⁵¹⁾。しかしながら、具体的な骨や血管の数へ言及、諸器官の構造や仕組みについての具体的で詳細な説明は、神の創造の巧みさを強調する効果を上げている。さて、さらに人類には男女の2種類があり、それぞれ姿は異なっているけれども、身体の基本的な構造は等しいという事実から、どれほど無知な者でも「これら一致し、秩序付けられ、調和し、似通っており、集合したものが、[唯一神による]一つの創造の内にあり、それぞれのあり方が、かの一者のやり方であることを知る」⁵²⁾という。こうして、自己について考えることから、まず創造主の存在を知り、次にその創造主が唯一であることを確認できる。

神に経綸される人間が、同時に自身の身体とその諸器官、諸感覚を経綸する者であることを指摘し、人間に関する記述が終わる。続いて物事の変化や時間の流れ、人類の糧として経綸されたものの中にも、唯一神を示す明らかな証拠があるとして、世界の様々な事物、現象の説明が始まる⁵³⁾。説明は天から始まり、地上へと降る順序で進み、それぞれが人間に与える利益の観点から（例えば、旅人の道標として星座があり、年月を知るために月の満ち欠けがあり、人々がそこで休息したり生活したりするために大地があると）語られる。天から地へ下降するこの構造は、同書全体の構造と重なるものであり、いわば同書の縮図ともなっている。ガザリーの「瞑想の書」は、人間の身体から記述を始める点では同書と一致しているが、その後は地上から天へと上昇する逆の順序となっている。神へと向かう修行階梯を述べる『再興』に相応しく変更されたものと推測される。地上の事物まで述べたところで、アブー・シャイフは、これらの様々な事物や現象を司るのも一なる神であることを重ねて指摘する。そしてクルアーンを引用しながら、人間や動植物の生死と復活も神の力によることを示して本章を終えている。

4. 第3章「それら[神の徴や威厳など]について考える者の恩寵」

本章は20の伝承から成り、預言者のハディースは含まれない。教友の言行は7つ、その他は後継世代とそれ以降の人物の言行である。冒頭から7つ、類似した伝承が続けて挙げられている。「1時間考えることは一晩の直立礼よりよい」⁵⁴⁾というイブン・アッバースの言葉や、「1時間考えることは60年の儀礼行為よりもよい」⁵⁵⁾というアブー・フライラ Abū Hurayrah (58/678 or 679年没)の言葉のように、それらの伝承は考える対象を明示せず、考えることは善行であり、儀礼行為と等しい、あるいはそれ以上であると述べる。儀礼行為の1つ、礼拝に関しては、例えば次のような内容の伝承が挙げられている。ある日、礼拝をしていたスフヤーン・サウリーが、天を見上げて気絶して倒れた。彼が倒れたのは、天を見上げたためではなく、考えることに集中したためである⁵⁶⁾。その他、礼拝前の浄めの水の冷たさに気付かなかったという伝承⁵⁷⁾にも窺えるように、考えるこ

51) Heinen, *Cosmology*, 47. ハイネンは、こうした用法は同書の意図を外れるが、タファククルという思考の対象が拡張されることで、ムスリムの科学者たちを新たな発見へ導いたとして、科学史上の意義を評価している。

52) *ʿAzamah*, Vol. 1, 279. クルアーンに、「もし、その(天地の)間に唯一神以外の神々があったならば、それらはきっと混乱したであろう」(21:22)など、同主旨の章句がある。

53) *ʿAzamah*, Vol. 1, 280 ff.

54) *ʿAzamah*, Vol. 1, 298. 「瞑想の書」には、同一の伝承がハサン・バスリーの言葉として引用されている。 *Ihyāʾ*, Vol. 4, 411.

55) *ʿAzamah*, Vol. 1, 300.

56) *ʿAzamah*, Vol. 1, 316–317.

57) *ʿAzamah*, Vol. 1, 310–311. ズバイド・イブン・ハーリス Zubayd ibn al-Hārith (122/739年頃没)の言行を伝える。彼は信頼できる伝承者で、礼拝をして夜を過ごす敬虔な人物であったという。 Ibn Hajar al-ʿAsqalānī, *Tahdhīb al-Tahdhīb fī Rijāl al-Ḥadīth*, ed. by ʿĀdil Aḥmad ʿAbd al-Mawjūd & ʿAlī Muḥammad Muʿawwad, 7 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyah, 2004, Vol. 2, 465–466 (以下 *Tahdhīb* と略記)。

とを通して、精神が高い集中状態に至りうる事が分かる。これらの伝承でも考える対象は示されない。本章で人間が考えるべき対象を示した伝承は3つだけで、それらはみな、来世に関する事柄を対象としている。

来世に関する伝承については、考える対象として来世に言及するのではない伝承も含めると、計7つある。それらは、復活の日や地獄の番人を思い恐怖をかきたてることや、考える者が来世で楽園に至ることを述べる。次のアブー・バクル Abū Bakr (13/634年没)の言行には、それら両方の要素が見出せる。なお、恐怖をかきたてる働きとしてのタファックルは、同語がタサウフに導入され始めた時期にみられる用例の1つである⁵⁸⁾。

アブー・バクルはある日想起し、復活の日と秤、楽園について、それらが近付くときを考えた。地獄について、それが迫り来るときを考えた。天使たちの階層、天と地が巻き上げられること、山々が塵のように運び去られること、太陽が包み隠されること、星々が散らされること [について考え]、言った。「私は、獣が近付いてきて食べてしまうこの緑色の若芽でありたかった。私は創造されなければよかった。」そしてこの章句が下った。「だが主の御前に立つことを畏れてきた者たちのために、2つの楽園があろう。」(55:46)⁵⁹⁾

ここで考える対象となっているものは、第1章同様、第4章以下の主題と重なる。天の楽園について、第1章では、考えることを通して善良な諸性質を身に付けた者へ「楽園へ入れ」と呼び掛ける伝承が1つあった。本章では、このアブー・バクルの伝承以外に、「来世の高みに至りたいと欲する者は、考えることを多くし、知者であれ⁶⁰⁾」や「禁欲すれば考え、彼らの心が天の王国へ昇る。すると彼らは[神の許へ]戻り至り、称賛を受ける⁶¹⁾」という伝承があり、考えることと楽園への到達が端的に結び付けられている。

第3章の伝承からは、考える者への恩寵とは、神の徴について考えることが、長時間の儀礼行為と同等あるいはそれ以上の価値を持つとされること、高い集中状態に至ること、来世においては楽園に至ることであると捉えられる。

V. 考察とまとめ

まず第1章冒頭で、神について考える能力のない人間は、神について考えてはならず、神が創造したものについて考えるべきであることが、預言者からの指示として伝えられた。それに続く第1章と第3章の伝承では、神の創造物について考えることがいかに有徳な行為であるか、そこから善良な諸性質を身に付けたり、高い集中状態に至ったり、究極的には天の楽園へ至ることが様々に述べられていた。これらの伝承を通して、世界を観察することは、信仰上の様々な利益をもたらす行為として意味づけられる。

第1章と第3章の伝承の中では、来世の事柄を含め、4章以下各章で主題となる様々な神の創造

58) Muḥāsibī, *Ri'āyah li-Huqūq Allāh*, ed. by 'Abd al-Hāsim Maḥmūd, Cairo: Dār al-Ma'ārif, [1984], 53, 61–62.

59) 'Azamah, Vol. 1, 308.

60) 'Azamah, Vol. 1, 312. カアブ Ka'b al-Akhbār (32/652 or 653年頃没)の言葉。

61) 'Azamah, Vol. 1, 307. アフマド・イブン・アブー・ハワーリー Aḥmad ibn Abī al-Hawārī (246/860年没)が、ある寓話を解説して述べた言葉。アフマドは第1章中のイスナードに度々現われる。敬虔な人物に関する伝承に詳しい人物であったという。Tahdhīb, Vol. 1, 49–50.

物が主要な思考対象であった。IV-2に引いたワフブの伝承に、自身の罪について考えるという表現が1箇所あるが、その他には神の創造物としての人間を観察する場合を除き、人間自身を考える対象とすることはほぼ皆無である。ハイネンとラトケの指摘通り、同書におけるタファックルは、確かに外界を対象とするとはいえよう。しかしながら、神の創造物について知ることにより神の偉大さを知り、そこからおのれの無力さを知り、謙虚になるという過程には、外界へ向かうことから間接的に人間自身へと向かう内向性が見出せた。考えることを通して善良な諸性質を身に付けることができるという点は、ガザリーの「瞑想の書」における人間に関わるタファックル（第1区分）にも通じる。タサウフの文脈において、より明確な自己反省の方法となるとしても、『威厳の書』のタファックルも、それに近い効果を持つといえよう。来世の罰を思い、恐怖をかきたてる働きとしてのタファックルも、スフィーの用例と共通する。また、考えることが有徳な行為であることを述べた伝承や、考えることを儀礼行為とする伝承には、ハサン・バスリーやスフヤーン・サウリーをはじめ、禁欲家として知られる人物の言行が多く含まれる点にも注目される。『威厳の書』はタサウフや禁欲主義の作品でないとしても、それらとも共通性をもつようなかたちで、世界観察を意味づけていることは興味深い。

一方で、第2章では謙虚さなどの諸性質に言及することがない。死後の復活についての言及はあるが、来世については語られず、専ら現実世界に関する記述であった。第1章及び第3章と、第2章では、記述の形式だけでなく、内容も大きく異なることが分かる。

第2章では、クルアーンの章句を受けて人間自身に目を向け、「建物に建築者がいる」ことから類推し、「人間に創造主がいる」という結論へ至る推論が示された。そしてこの類推を端緒に、厳密な論証ではないが、章全体を通して神の存在とその唯一性を証明していると理解できる。世界を観察することは、唯一なる神の存在を確実に知るための方法でもあるといえる。既述のように、アブー・シャイフの『威厳の書』は神の存在を前提としており、そこに神の存在を証明する意図はないとハイネンは指摘していた。しかし伝承形式を外れる本章について、この指摘は当てはまらないであろう。被造物である世界から、創造主としての神の存在を類推する方法は、イスラーム神学における神の存在証明の主要な方法の1つであり、そこでは建物とその建築者の例も用いられる⁶²⁾。今後、アブー・シャイフの『威厳の書』における神学の影響を考察することも新たな課題となろう。また、世界の秩序ある様子から神の唯一性を示すという本章の内容は、ムハースビーの『威厳の書』に類似している。これら同名著作の関係性も再考する必要があるだろう。さらに、本章はハイネンがいう伝統的な科学を外れ、ギリシア科学の成果を取り入れた唯一の章でもある。アブー・シャイフが自分自身の考えを述べたのではなく、他者の見解を紹介してみせただけであるかもしれない。それでも、同書のこの位置にそれを挿入したことに、何らかの意図はあるはずである。同書における第2章の位置づけを検討することは、同書全体の理解のために重要であろう。

以上を足掛かりとして、さらに『威厳の書』の分析と考察を進め、同名著作群と共に、同書がイスラームの知的伝統の中でいかに位置づけられるのかを明らかにすることを目指したい。

62) Davidson, *Proofs for Eternity, Creation and the Existence of God in Medieval Islamic and Jewish Philosophy*, New York: Oxford University Press, 1987, 154, 156.